View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

大学における教養教育を考える（その９）
―「現代社会と人」の授業実践の検討を通して―

江崎ひろみ[*1] 重光由加[*2] 小沢一仁[*3] 滝沢利直[*4]

A Review of Liberal Arts Education at a University level through an Omnibus Lecture series "Modern Society and People" (Part 9)

Hiromi Ezaki[*1] Yuka Shigemitsu[*2] Kazuhito Ozawa[*3]
Toshinao Takizawa[*4]

Abstract

Part 9 of this series reviews Liberal Arts Education at a University level through an Omnibus Lecture series "Modern Society and People" which we offer at Tokyo Polytechnic University in the academic year of 2015. Each of the teachers discusses the modern society from the point of their field.

Ezaki reviews her lecture in Chapter 1. She aims her lecture to encourage students to think scientifically in information-oriented society. "Scientifically" means logically, critically and objectively. Such thinking skills help students to live on their own initiative. Shigemitsu, in Chapter 2, describes her lecture and students' reaction to the lecture. Her lecture was about Pragmatics and covers turn-taking system, cooperative Principle, and politeness theory. The reaction papers from students reveals that students understand how the communication should be. They also realizes how they manage to talk for efficient communication and establishing human relationships. In chapter 3, Ozawa describes that how students realize the problems of this Modern Society. Reports from the students show that they mention employment problem, internet addiction, educational problem, low birth rate and longevity, increased tax, international problem, environment and energy and so on. In chapter 4, Takizawa discuss the resent situation of disparity. He asked students about the criteria of "win-lose" of ordinary people. It is important to think about it by themselves although we already have general idea about it. The students accepted their situation and destiny and understood that it is important to self-affirm after his lecture.

Finally, Takizawa summarized this omnibus lecture series as follows:

Teachers who contribute to this paper prepared their lecture by analyzing the latest findings in the study area. The students could learn the topics and think the theme by themselves after each lecture. It is important to give students thinking skills through the lecture so that they continue to have interest in social problems in modern society.

はじめに

「現代社会と人」は、今年度から工学部基礎教育研究センターの教員全員が行うオムニバス形式の授業である。それぞれの教員が現代社会についてそれぞれの専門分野の観点から論じている。

学生には初回においてこの科目の目標と概要を解説して目指すところをシラバスに基づいて以下のように伝えている。

「文明が高度に発達した現代社会は、人類に便利な生活をもたらしたと同時に、また新たな難問（アポリア）や課題も生みだしています。これらの難問や課題を紹介してその解決策を考察することを通して、皆さんが生きている現代社会を改めて考え直す力を獲得することを目標としています」。

本科目の授業担当者が、自身の担当回を分析し今後のよりよき授業の創造の可能性を探究している。

本論文は昨年までの研究【本学紀要「大学における教養教育を考える】の継続である。それぞれの専門分野から、「現代社会と人」の授業実践を通しての教養教育の内容および学生の小課題文をもとにしたその教育効果について検討したものである。

[*1] 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター教授第１章担当
[*2] 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター教授第２章担当　[*3] 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター准教授第３章担当
[*4] 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター教授　はじめに、第４章、まとめ担当
2015 年 9 月 26 日 受理

第 1 章　科学的に考えよう

江崎ひろみ

１．講義構想の背景と目的

現代の社会ではパソコンやスマートフォンなどにより容易に情報を検索することができ、学生は図書館などに出向かなくても簡単に情報を得ることができる。これは大変便利なことであるが、インターネットなどで検索して得られる情報の中には根拠が不明であったり、間違っていたりするものも少なくない。例えば、インターネットでは様々な Q&A サイトがあるが、病気などについての質問に対し、医師ではない人が回答していたり、医師でも質問とは別の分野の専門家が答えていたりすることを目にすることが多い。このように信頼できる情報からいわゆるデマまで、様々なレベルの情報に溢れた社会において、我々は情報を鵜呑みにするのではなく、批判的、客観的に判断することが重要である。ここでは、そのような態度を広い意味で“科学的思考”と捉えて、その意味と重要性を理解してもらうことを講義の目的とした。

２．授業内容

授業では、いくつか具体例を挙げ、それぞれについて問題点や根拠となる研究データなどを示して解説することにより、科学的に考えるということについて具体的に示すようにした。

取り上げた例は

1. 地球温暖化によって大型台風が増えている
2. マイナスイオンは体に良い
3. 天然のものは体に良く、人工のものは良くない
4. 野菜をよく食べる人はガンになりにくい
5. サプリメントは摂った方がよい
6. インターネットの情報はおおむね信用できる
7. 平均点が 50 点のテストは難易度がちょうどよい
8. 東京の年間犯罪件数は全国一であるから、東京は日本で一番危ない都市である
9. 宝くじで一等が当たる確立は日本のすべての大学生（約 250 万人）の中から自分が選ばれる確立よりも大きい
10. 下図で、現象 A と現象 B は関係がある [1]（図は省略）

の 10 項目である。これらの中にはメディアで目にしたり、実際にインターネットでそのような主張を見かけたりしたものがあるので、学生にとってもどこかで聞いたことがある話が多いようであった。これらの項目について、正しいと思うか、その根拠は何かなど、学生に回答を記入させた後、一つ一つ解説を行った。1. の温暖化による大型台風の増加という話は著者自身も新聞などのメディアで何度も聞いたことがあるほどで、正しいと判断する学生も多かった（8 割程度が正しいとした）が、実はこれは誤りである。少し古い論文であるが、2009 年の予防時報に気象庁予報部の永田雅課長の「台風観測と予報についての最近の話題」[2] によると、過去 58 年間のデータに基づき、台風の発生数、日本への上陸数、強さについてはっきりとした増減は認められないと結論付けている。

2. のマイナスイオンについても、一時期盛んにその効用を謳った商品が宣伝されていたためか、これを正しいとする学生が 3 割程度みられた。しかし、マイナスイオンと言っても、何のイオンかによって人体への作用は大きく異なるから、一概にマイナスイオンが体によいとは言えないことは明らかである。森林浴や滝のまわりなどでマイナスイオンが多く体によいと言われることがあるが、これはあくまでイメージで、明確な科学的根拠はない。

3. の天然信仰や 4.の野菜の効用、 5. のサプリメントの効果などについては判断が分かれて、正しいとする学生は 2 割から 4 割程度だった。食品の健康効果は薬と異なり科学的根拠が明確でないものが多い。野菜摂取とガンとの関係は多くの調査が行われているが、調査によって結果は様々である。数十万人を対象にした調査においても、ある調査では野菜摂取と発ガンリスクには相関があるという結論を出しているが、別の調査では野菜摂取によるリスク低下は見られないという結論が出ているといった具合である。薬は動物実験や人体実験で、効果、適量、副作用など科学的根拠は明確であるが、食品の影響は薬のように効果が現れにくいし、人には個人差があり、様々なものを食べているため、食べているものを評価すること自体非常に難しい。「〇〇は体によい」という宣伝をよく目にするが、食品の効用は薬とは異なり、科学的根拠が明確ではないものが多いことを知っておく必要があるだろう [3]。

このように、それぞれの項目について根拠はあるか、研究データがあればそれを紹介して、実際はどうであるか、解説を行っていった。ここに挙げた例は間違いかその根拠は明確ではないものばかりである。それぞれの項目に即して何が誤りか、何が足りないか、何を考慮すべきかなどを示すことにより、科学的、客観的な考え方を伝えることを心がけた。

6. のインターネットの情報はおおむね信用できる、は 6 割程度の学生が間違いと答え、信用できるとした学生は 1 名(2%)、分からないが 2 割程度だった。では、インターネットは信用できないから検索はしないかというと、多くの学生は信用できないと認識しつつも、日常的にインターネットで検索しているようである。時間の制約から、この問題についてはあまり時間を裂けなかったが、この現実をどう考えるか、この点を深く追求する必要性を感じた。インターネットで検索する際に、より信頼できるデータをどのように見つけたらよいか、インターネットを利用する上でのスキルについても、著者の知識と経験の範囲内で簡単に説明を行った。

３．学生の課題作文

授業の最後に、科学的に考えるということをどのように理解したか、また、授業を受けてどのように感じたかを書いてもらった。

（電子機械学科 1 年生（男））一部抜粋：

私は今日の講義「科学的に考えよう」を受けて、何事も鵜呑みにせず、自分の考えや疑問を持つことが大切だと考えました。他人が自分の考察や説明を読んだり、聞いたりした時、論理的に分かりやすく、特に具体例などを使って説明する技術が社会を生きていく中で必要だと分かりました。

（生命環境化学科 4 年生（男））一部抜粋：

日頃出会う様々な情報が果たして正しいのかどうか、科学的な思考でより多くがより分けられるのだと思った。また、そのように思考で冷静にデータを調べれば、すくない情報からでも、その正しさを推測することが可能であると思う。現代社会は情報にあふれ、それらの情報の選択は非常に大切なことである。今のこの社会を生きるのに科学的･論理的思考は情報選択の社会において、第一に考えなければいけない感覚の一つであると思う。

（建築学科 4 年生（男））一部抜粋：

最近はインターネットの普及にともなって、どんな情報にも、携帯電話を使い手元ですぐにアクセスできるようになりました。何かを買うときは必ずインターネットでその商品を検索して、レビューで高評価がついていることを確認してから買うようにしています。実際、そうして買い物をすると大きな失敗をすることはほとんどありませんし、とても便利なのですが、その反面、簡単に情報が手に入ってしまうため、自分でしっかりと考えて決める機会が少なくなって、そういった判断力が鈍ってしまっているのではないかという不安もあります。こんな情報が溢れている便利な社会だからこそ、受け身になるのではなく、情報を使えるようになりたいものです。

（建築学科 3 年生（男））

今日の講義は内容が薄いと感じました。具体的にどこが科学的なのか分かりませんでした。ですが、一つ感じたことがありました。それは、インターネット情報は信用できるか否か。大抵の人は信用できないと答えると思います。僕もその一人です。しかし、信用できないと分かっていながら何故インターネットを使い、それが答えだと思うのか。このネット社会ではなくてならない存在が危ないものだと知りながら。ならば何故信用できるものに変えないのか。結局は目に見えないものだからだと思います。自分に何かないと人は代われない生き物だから。サプリメントも人工物も、自分自身に変化がないとそれが良いものか、悪いものか、わからないんですね。結論、科学的に良いものばかり摂っても、それが自分に良いものだとは限らない。そう思いました。

４．まとめ

学生の課題作文を読むと、講義の意図は概ね伝わったと考えられる。日頃よく耳にするので何となく正しいと思っていたことが、実は誤りであったり、明確な根拠がなかったりしたことを知って驚いたという感想が多かった。しかし、最後の作文例のように、内容が薄く何が科学的なのかわからなかったという感想もあった。様々な分野から多くの具体例を挙げて解説した方が学生の興味を引きやすいと思い、10 問用意したが、項目が多かったために、一つ一つを丁寧に解説する時間がなく、最後の方はごく簡単な説明しかできなかった。これが、内容が薄いという批判につながったのかもしれない。次年度は項目を絞って、より丁寧に説明するように心がけたい。また、授業時間内に学生が論文やデータを評価して判断するような時間も設けたい。さらに、学生相互で討論する時間を設けられれば、自分とは異なる考え方を知ることにより、視野を広げることができるだろう。このような過程を踏むと、科学的思考とは何か、理解がより深まることが期待できる。これらは次年度の課題としたい。

参考文献

1)京極一樹　「ちょっとわかればこんなに役に立つ　統計･確率のほんとうの使い道」　じっぴコンパクト新書(2012)
2)永田雅　「台風観測と予報についての最近の話題」、予防時報 238、p.38 (2009)
3)藤原葉子　「サプリメントとの上手なつきあい方」、桜蔭会会報　第 244 号 p.10 (2015)

第 2 章 多文化社会環境での「ことば」を考える

重光由加

本章ではオムニバス講義「現代社会と人」で行った『多文化社会環境での「ことば」を考える』での平成 27 年度（6 月 9 日実施）の講義内容の紹介と、学生が提出したリアクション・ペーパー、レポート課題より学生の理解を考察する。

１．講義の概要

講義の目的は、国際化やグローバル化でどのような状況になるのかを広くとらえるために、私たちが「ことば」をどのように使っているかを改めて理解し、考察させことばの機能についての理解を深めさせることである。そのために、語用論の知見から以下のものを講義した。

・エスノメソドロジーの会話分析の知見から、「なぜ

話すのか」「１度の順番に一人だけが話す不思議」「話者がスムーズに交代できるのはなぜか」「割り込み、沈黙に不快感や居心地の悪さがあるのはなぜか」「そのような会話の仕方はどのように身につけたか」など、会話の規則、ターン・テイキングのルールの基本(Sacks, Schegloff and Jefferson, 1974)。

・日常言語哲学者のポール・グライスによる会話の中で守られるべきことと，期待されるものを定式化しようという試みから提唱された、会話の協調の原理と四つの格率「(Quantity（適切な量を）、Quality（真実を）、Relation 関係あることを）Manner（誤解のないように整然と）」について。実際の会話ではこれらの格率が守られていないことへの気づき(Grice, 1975)。

・配慮のコミュニケ―ションとして、ポライトネス理論についての講義（Brown and Levinson, 1987）。

これらの講義のあと、実際のコミュニケーションの例として、言語にかかわるロボット開発に関して、将棋をするロボット、大学入試問題が解けるロボット、世間話をするロボット（通称　井戸ロボ）の開発の進捗状況について解説した。具体例としては、新聞のロボットを特集した記事（朝日新聞朝刊６月１日）から、科学者の立場からどのようなロボットが可能であるか、それに対して、実際の人間はどれをロボットにまかせどれは任せたくないと考えているかなどについて。BBC ニュース（www.bbc.co.uk/news/world-asia-33562368）から、長崎のホテルで、女性の姿をしたロボット１０台をスタッフとして導入する実験例などがしたホテルがオープンすることについて紹介した。

２. リアクション・ペーパーの課題

言語コミュニケーションの知見、具体例の講義をもとにして次のような課題を出した。新聞の記事から、介護ロボットが 2030 年までに実現可能な範疇にあるので、言語機能としてどのような能力を与えるべきかを 400 字から 800 字でまとめさせた。

３. 学生からの回答と考察

以下、学生から得られた回答を示す。

・会話参加者として、会話に参加している人たちの力関係を察知する機能。

・会話の聞き手として、話を真剣に聞き、理解できる機能、同じ話を何度も伝えることを避けるため、一度聞いた話を記憶する機能。聞き手として、正しいタイミングで相槌をうつ機能。話し手の気持ちをイントネーションから察し、話し手の立場にたって話を理解する機能。面白い話で笑う機能。

・話の内容の含意(言外の意味)を理解する機能。

・話し手としての機能には、他の会話参加者の発言との重複発話を避ける機能。話している人が話をやめてしまうことを防ぐため。話すことと、聞くことのバランスをとって会話ができる機能。また、他の参加者によって発話量を自動調整する機能。たとえば、無口な人間が相手の場合は、ロボットがよくしゃべり、おしゃべりの人が相手の場合は、黙っている機能をもたせて会話参加者のバランスを考えられる機能。会話に入ってこない人がいたら、話題をふって会話参加の均衡を保つ機能。話してよい場所と、よくない場所を区別できる機能（病院では話さないなど）。まわりの静寂に合わせて声の音量の自動調節機能。相手の話したい話題を察知し、その場で何が必要な情報を判断できる機能。一つの話題から話を発展させる能力。相手の話に的確な質問をして、正しい情報を伝え、間違った情報は伝えない精巧さ。

・認識論的な問題としては、幅広い年代の人と話すには、知識の蓄積が必要。人と話すには知識の蓄積が必要。また、初めて聞いた語や表現を蓄積していく機能。多種多様な人を見分ける適切な話をする機能。

・楽しい雰囲気を作る機能。ジョークなどを言えるなど。

・感情を判断する機能。いっしょに喜んでくれる、悲しいときは励ましてくれる機能。

・ジェスチャーがある。ことばだけではなく身振り手振りをつけながら話す機能。

・大勢の人が会話や人混みでも会話でも不要なノイズをカットして、必要な音だけを聞く機能。

・延々と話し続けない機能。人間が休みたいとき、一人でいたいときには声をかけない機能。

以上が学生から得られた、会話をするロボットに装備する必要がある機能である。技術的にすぐ可能なもの、機械だから人間より高度な能力があるであろう機能というものから、人間でも難しいと思われる回答が集まった。

これらの回答から、学生は講義部分のコミュニケーションの基本については理解し、情報伝達と、潤滑な人間関係のためにはどのような機能が必要かを整理し、会話に必要だと学生自信が認めたものを書いたと思われる。また、この回答からは、機器の実現の可能性はあまり考慮されていないように見受けられる。しかし、課題ではロボットを想定して書かせたが、かなり高度なコミュニケーション能力をロボットに求めている。実際に回答に反映されているのは、実際の人間の会話では、どのような能力が求められるかを、学生が一人一人自覚しており、学生自身も、会話やコミュニケーションに何が必要なのか、どのような能力が身についていなければならないか、その理想形を持っているということがうかがえる。

４．まとめ

本節はオムニバスの「多文化社会環境での「ことば」を考える」という科目での講義内容と、学生のリアクション・ペーパーに対して概観した。だれでも専門知識がなくても、ことば（非言語を含む）を使うので、ことばの講義は日々の体験の中から考察が可能である。しかし、本学の学生は言語系の概念や構造の予備知識がほとんどないため、１時間程度の講義では、導入部分のわずかな部分しかできなかった。例年は異文化を強調した講義を行っていたが、学生にとってはあまり現実性のない話題であり、理解が難しかく、学生の理解度の改善が必要であると感じられたが、本年はロボットの言語能力として切り口を変えたところ、学生の専門知識やから、1 時限の講義でも考えて書くという作業は例年に比べ平易だったように思われる。

なお、今回の学生の小論文に対して、こちらからコメントを言う機会がなかったが、異文化間コミュニケーションや会話のスタイルの観点から、学生の回答を分析すると、かなり集団主義・階級主義の傾向がみられる会話であり、コミュニケーションスタイルで言う高コンテクストな会話を学生自身が妥当な会話と考える文化価値観を持っていることが浮き彫りとなった。自文化は他の文化と接しなければ、自文化の特徴に気づけないという特徴があるが、日本語に特有の文化価値観だけでは、今後のグローバル化に対応する言語技術能力には結びつけられないだろう。学生には、世界にはさまざまな価値観に基づいた話し方や会話のスタイルがあることを、伝える機会が今後望まれる。

平成２７年度から新しく始まった講義科目の「言語コミュニティと言語」「言語とコミュニケーション」「国際社会とコミュニケーション」の履修への動機づけにつながればなお一層、本科目の目的にかなっているのではないかと思われる。

参考文献

Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). Politeness: Some universals in language usage. Cambridge: Cambridge University Press.

Grice. P. H. (1975). Logic and conversation. In P. Cole, & J. L. Morgan (Eds.), Syntax and semantics volume 3, Speech acts. New York: Academic Press. pp. 41-58.

Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest system for organization of turn-taking in conversation. Language, 50, 696-735.

第３章　学生が捉える現代社会の問題とは

小沢　一仁

本論の目的は、「現代社会と人」の講義において、授業開始時のガイダンスで実施した、履修学生に自分にとっての現代社会の問題についての小論文を検討することである。そこで、まず、学生へのガイダンスの内容と本授業の目的を振りかえる。そして、学生による小論文から学生自身が現代社会において何を問題として捉えているかを検討する。最後に、この授業を通して大学における教養教育のひとつの試みとしてのこの授業のあり方を検討する。

１．「現代社会と人」とガイダンス

(1)学生へのガイダンスの内容

まず、ガイダンスにおいては「現代社会と人」の講義の流れと目的を学生に提示した。本授業はオムニバス授業であり、毎回担当者が替わる。そして、各担当者は、自分自身の専門領域と現代社会との接点に関わるテーマを提示し、講義を行う。その後、担当者が提示した授業に関わるテーマについて 400 字の小論文を作成する。さらに、評価の方法は、毎時間の小論文を各担当者が採点し、その累積の合計を 100 点満点として換算する。また、授業計画として、各担当者の講義のテーマと日時を提示する。最後に、学生自身にとって「現代社会の何が自分にとっての問題か？」というテーマで 400 字の小論文を作成し、授業時間内に提出する。小論文作成時間は、20 分ほどである。

(2)大学における教養教育の試み

ガイダンスにおいて学生に伝える重要な事項は、学生の立場において大学卒業後、現代社会に出て行く上で、「いかに生きるか」についての参考にするためにこの授業を真剣に聴いてほしいと伝えることである。

そこで、「現代社会と人」の開設の意義を振りかえると、大学における教養教育についてのひとつの試みとして本科目は設定されたのである。教養教育については、文科省が国立大学文系学部の廃止という提言を行ったことをきっかけにして、様々な立場から反論がなされており、新聞紙上においても議論が活発に行われている現状がある[1)]。このような大学における教養教育のあり方についての問題について、現代社会と各学問領域との接点を提示することが教養教育であることをその答えとして背景に持つものである。そして、履修する学生は、自分が大学卒業後現代社会に出て行くことになる。その現代社会において、各専門領域から見たテーマを学ぶことによって、社会人として自分自身がいかに生きるかのヒントに本講義をすることが可能となると考えられる。このような検討に基づき、本授業は開設されたのである[2)]。

2. 学生が捉える現代社会の問題とは

(1)学生自身が捉える現代社会の問題

本講義における、各学問領域と現代社会との接点に関わるテーマとは、当然各専門領域を持つ担当者が設定するものである。各担当者は、各専門領域と現在社会との接点を探り学生にとって重要と考えられるテーマを選択するのである。では、学生にとっての現代社会における問題とは何だろうか。つまり、各専門領域を持つ教員の側から見た現代社会におけるテーマと学生が持つ現代社会における問題との関わりという論点が浮き彫りになってくる。

そこで、ガイダンスにおいて、まだ各担当教員の授業を受ける前に、履修した学生自身がどのように現代社会における問題を捉えているかを明らかにするために、ガイダンスにおいて実施した小課題を検討することとする。

(2)全体的傾向

履修学生は、52 名である。学生の小論文の内容は、就職(12 名)、ネット・ゲーム依存(6 名)、教育、少子高齢化(6 名)、増税(5 名)、国際紛争(2 名)、環境・エネルギー(2 名)、その他(13 名)に分類することができた。各分類の％を記入したグラフは図 1 のようになる。

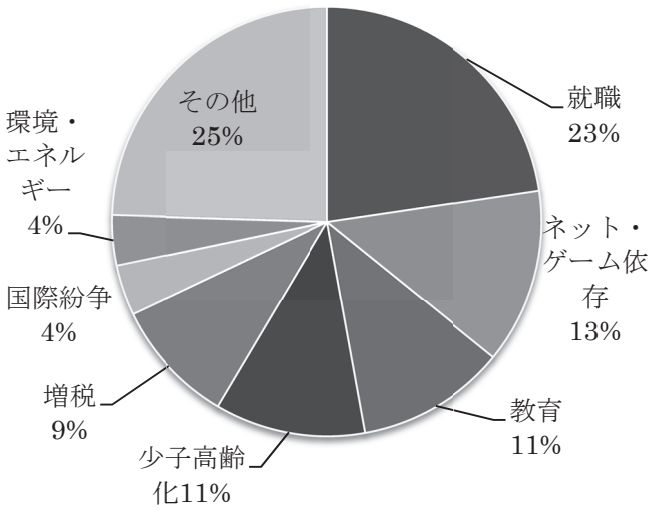

図1. 学生の捉える現代社会の問題

全体的傾向を見ると、最も多いものが就職問題であり、全体の約 4 分の 1 であった。次いで、ネット・ゲーム依存問題、教育問題、少子高齢化問題、増税問題がそれぞれ約 1 割であった。そして、国際紛争、環境問題、その他であった。この結果から、学生にとっての身近な問題は、大学を卒業した後の就職であることが明らかになった。まずは、自分自身が社会の中で仕事を持って働くことが、現代社会で生きる上での問題であると捉えているといえる。また、日常で学生が用いている電子機器によるネット・ゲームへの依存の問題、自分たちが小学校から大学へと教育を受けてきたこと教育問題、社会の人口比率を学生が見聞きしたことからくる少子高齢化問題、学生が消費活動の中で支払う増税問題も、学生にとっての身近な問題であるといえる。環境・エネルギー、国際紛争も問題として捉えている学生がいる。最後に、その他が約 4 分の 1 であったが、すべて 1 名のみで個々の学生様々な内容であった。このことから、全体的傾向では就職問題に関心を持つ学生が多いが、その反面、学生自身個別な現代社会についての内容を問題として持っていることも考慮すべきであるといえる。

(3)個別事例の提示

次に、それぞれの分類した内容の中から学生自身が記述した個別の文章を見ていく。学生の小論文の中から、内容の意味に影響を与えないようにしながらも、多少の改変を行ったことを付記しておく。

①就職問題

「自分の先輩で何十社も受けても内定が決まらない人がいる。就職活動をすることになった時に、内定をもらえるかどうかとても不安である。』「自分がバイトで働いている時に、自分と同じ条件で生計を立てている人がたくさんおり、社会保障もままならない崖っぷちで頑張っている人達が想像以上にいることに気づいた。しかもそれらの人達は都市生活にはなくてはならない存在なのにとても軽く見られていて、世間の目は冷たいなと感じました。それでもそこから仕事をもらわざるを得ない現場の人達がいて、今はまだ社会が回っているかもしれないが、いつか限界を迎えるのではないかと思いました。」

②ネット・ゲーム依存問題

「自分は、スマホに時間を操られている感覚がする。休み時間になるとツイッターを確認し、家に帰って勉強する時もラインで集中できず、寝る直前まで見ている。もっと自由に縛られずに生活したい、誰からも縛られずに生活したいと思う反面、連絡が来るとくだらないことを長々話してしまう。」

③教育問題

「自分の知り合いには、親からの虐待や学校でのいじめを受けて、引きこもりや不登校、非行に走った人がいる。いじめや親からの虐待で外に出られなくなった人は、何の非もないのに自分の人生を壊されてとても問題だと思う。」

④少子高齢化

「街を歩いていても若い人よりも中年に人が多いように見える。高齢者と若い人の割合がバランスのよい位置にあれば政治や経済などの問題が解消したり、若い人と高齢者がお互いにとってよりよい生活が送れるのではないか。」

⑤増税

「少し前までは５％であったので、気にする機会はありませんでした。いまでは１０％に上げる話も出てきているのでこの先不安です。脱税や議論の間に寝ている国会議員を見ると、こんなことをしている人達に自分たちの未来を任せることができるのか不安です。」

⑥国際紛争

「私も大学に入学するまでは韓国、中国によい印象は持っ

ていなかった。メディアでは批判されているし、両親の影響もあった。考え方が変わったのは大学に入学して仲良くなった友人が韓国出身であったことがきっかけだった。彼らのよいところを知って今まで、嫌悪感を抱いていたことがはずかしくなった。」

⑦環境・エネルギー

「化石エネルギーの消費で二酸化炭素が増加し、地球温暖化につながっている。自分も社会に出たら電気自動車などの環境に優しい車を作りたいと思っている。」

以上のように、学生の小論文から引用をすることで見えてくることは、学生自身は自分が現代社会で生きていくことを彼らの立場から真剣に考えている姿である。また、本論には誌面の関係で掲載することはできなかったが、その他において、その学生のみでどのグループにも分類できない内容が見られたが、そこでも真摯に自分の生活を振り返り、現代社会の問題を考えている姿がみることができた。

３.今後の課題

全体的傾向及び個別の内容を見ることから、学生がそれぞれの現代社会の問題を真摯に捉えている姿が浮き彫りになってきた。つまり、これまで筆者は、現代社会に卒業後出て行く学生であり、その学生が将来社会に出る上で必要となる知見を提示することが本講義の意義のひとつであると考えていたが、その考えは誤っており、既に学生達は現代社会で生きているのであり、大学生という立場でありながらも、既に現代社会に出ているのである。

このことから、既に現代社会に生きている学生達の真摯な姿に答えられるような、講義内容を提示する必要を改めて感じ、さらなる授業内容の精錬が必要であると考えられる。

参考文献

1)　人文系学部廃止要請に批判相次ぐ　日本学術会議が討論会 2015年8月1日　朝日新聞朝刊

2)　小沢一仁・滝沢利直 2014 大学教育における教養教育を考える（その 8）―「現代社会と人」の授業実践の検討を通して―、東京工芸大学工学部紀要 Vol.37、No.2 pp.61-70.

第４章　「勝ち組・負け組」と「人情」

滝沢　利直

１．授業内容と目標

現代社会において、「格差」が社会問題性をもっているという指摘があることを示した。この格差をめぐっては感覚印象で語ることを超え出て、学生各自が様々な知見に触れながら我が事として受け止めること（当事者意識）を促すことを目標とした。

格差にもいろいろな格差がある。経済格差、男女格差、地域間の格差、教育格差等と多様である。希望格差という観点で格差が問題性をもっているという指摘をした教育社会学者の主張も紹介した。経済格差に関しては、「勝ち組・負け組」という刺激的な言葉で格差の様相を表現していることを紹介した。

一般的には、勝ち組は現代において優れた社会的諸条件を獲得した人であり、負け組はその逆である。学生たちはその表現の意味するところは現代に生きる生活人としてそれなりに理解している。そこで、所得分配を測る指数としての「ジニ係数」の実体を示しながら、印象論としての格差ではなく、その根拠を示した。さらには、いわゆる貧困家庭の子供が持参する弁当の事例、貧困の青年の全財産の事例、進学を断念した高校生の事例等を示した。このような格差は原理的には、社会の在り方を是正していくルールの問題である。[1)] 謂わば「すべり台」から下へ一端落ちていったらなかなか這い上がれない実情がある。[2)] そこで支援政策の充実化が求められていることを伝えた。いわゆる弱者を孤立させない為の充実化が必要である。そして、今後は「社会的包摂」の重要性も示した。つまり家族や地域の紐帯の変節・変化が今日生起しているが、その稀薄化や分裂化を克服していくために弱者を社会の中へ包摂していく施策や諸工夫が重要である。行政も大事だが、仕事づくりや公益実現に向けた住民や諸グループの社会的互助システムや「社会的企業」を設けることが孤立や断絶を包摂へと改革していくことを指向している。そして現にそのような改革をめざした事例があることを紹介した。

格差を巡る優劣は「人情」として解釈できるかもしれない。あるいは、数学者藤原正彦が日本という国に潜勢している「惻隠の情」の復活を主張しているが、この情が可能性をひらくだろうかと問うた。「慮る」という情の機微の美しさを保持する必要性があると言っているが、今後これを指針として信頼できるかどうか問うた。[3)] 競争原理のただ中で活躍している企業人の中には、そのような情で格差をめぐる諸問題が解決できるほど甘くはないという主張が強くあることも紹介した。

競争とイノベーションが理不尽な不当性を惹起しているとしたら、やはりそれを改革していくルールの改変をしていく知恵と交渉力が必要であることを示した。

筆者は、再び「勝ち組・負け組」という己の人生の裁定の見方や仕方について問うた。経済格差の勝ち組が幸せを大いに保障するのかどうかを問うた。そして、「さとり」世代と「バブル」世代の違いについて紹介した。ちょうど親子間世代の違いである。たとえば「さとり」世代の高校生は、「常に戦うように仕向けられていたバブル世代。人を蹴落とすという感情をむき出しにしたバブル世代」に対しては「何それ。最低じゃん!」と応答する。「人に勝ちたいとは思わない」という彼ら

の実態も紹介した。[4)]

授業者は、これからの社会を生きる実力のひとつとして「ほんとうに困ったときに『助けてっ!』と言える力」だと投げかけた。こういう共生の感度は、互助精神や相互承認の力の証左であるといえないだろうかと投げかけた。さらにはまた、「誰かのためになる」生き方は欺瞞的で楽観的かを問うた。[5)]

最後に、「自尊感情」という観点から人生の裁定の仕方があるのではないかということを示した。自尊感情を育む人生の歩みについて示した。自尊感情には「基本的自尊感情」と「社会的自尊感情」がある。前者はありのままに自分を受け入れ肯定し、自分はこの自分でいいという自己肯定感である。そして人間はまた、他者・社会において評価されることによって自尊感情をもつものでもある。それが時に他者との比較をする。幸せをその相対化において感じるということである。社会的自尊感情である。この後者が肥大化して前者が縮小している場合は、何か人生において問題に遭遇したときに脆い状態になるし、不遇感を強く感じる場合が多い。前者の自尊感情は他者との、特に親や家族との、共有体験を豊かにもつことによって育まれる。これがとても大切であることを、近藤卓の知見を示しながら説明した。

現代社会の格差問題の是正は、公的な諸施策や民間のプロジェクトの立案等によって必要である。そして同時に、勝ち・負けの裁定視線を時々は自己肯定感という観点に視線変更して現代を生きることを問うことも意義があることで、本講義をまとめた。

２．学生の小課題作成文について

＊多様な「格差」があるが、いずれの格差も解消するべきであるという立場の意見の記述。これは、「平等」が目指されるべきであるという社会認識の表れである。

＊「さとり」世代の感度を自分も内包しているという自己理解をする立場と、それは努力を回避するための言い訳であるという批判をする立場の両者があった。

＊人間の勝利とは努力と相関である。この一点から考えるべきであるという意見の記述。

＊人間社会には競争はつきまとうものであるという人間理解を示した記述。

＊「幸せ」とは、結局は家族との平安であるのだという記述。

以上のように、「人間の幸せとは何か」を改めて問うことは、日々の勉学の忙しさの中においても意義があることが示された。

「学生が考えること」を目指して授業を行ったのだが、一定程度にそれは達成されたことが窺われた。このテーマは、現実の社会を生き抜いていくための学生一人ひとりの独自な態度や思考の傾向を映し出す。本音と建て前という二元対立の葛藤を相対化することを目指した。相対化していくという「考える」ことを一定程度促した。

「勝ち・負け」の基準は、どこにあるのか。一般通念として暗々裡に人々は抱いているが、改めてその基準を問い直した。自分の境遇を受け入れ、そしてそれに対してどのように自己決定していくかが大切だということも一定理解された。また、いろいろなチャンスに挑める条件が人間に平等に与えられているかどうかはチェックすべきだという権利感覚も少しは理解された。

〇以下に学生たちの小課題文を挙げる（学生たちには匿名で挙げることの了承を得ている）。

＊メディア画像学科４年男子学生：
「格差」という言葉、私は嫌いです。どんなことにも、格差はあってはならない。男女の格差、教育の格差、雇用の格差。格差から良いものは生まれないと私は思っています。何にしても“平等”が一番です。勝ち組・負け組・負け犬。人を勝ち負けで決めるのはおかしいです。誰かに勝つ事が大事ということではなく、自分のペースでやりたいことをやって自分が満足できればそれでいい。それが幸せな人生なんだと思います。

金子（勝）さんの考え方、私は分かります。自分が誰かの為になれる、「ありがとう」と感謝の言葉を言ってもらえる・・・そんな幸せなこと、他にあるでしょうか。

「人生の勝ち組は“助けて”と言える人」。確かにそうだなと思います。身の周りに自分を助けてくれる人がいる。何でも言い合える人がいる。それを“勝ち組”とまとめるのは好きじゃないですが、勝ちでも負けでも“助けて”と言える勇気はあった方がいいのである。

＊生命環境化学科３年：
勝ち組と負け組。それがあることは否定しないし、否定すべきことでもないだろう。それぞれに得られる報酬が違うのは努力と才能により当然のことだからだ。

では、僕が勝ち組と負け組のどこを問題視するかというと、勝ち組・負け組がくつがえらないことだ。紹介された教育格差が分かりやすい。これは、言ってしまえば、親の金で子供の学力や学歴が決まることだから。もちろん例外もあるが、塾や習い事がますます重要になる世間で、金を必要とするそれらを享受できないのは不利になってしまう。そう考えると、子供達は生まれた時点ですでにスタートラインが違うことになる。大きな差が最初にあるのはこれから学ぶ子供達にとってあまりに理不尽だと思う。

努力した人、稼ぐ人が勝ち組となり、努力しなかった人が負け組となることは認められるべき必然であるが、まだなにもしていない子供達には誰にでも同じよ

うに勝ち組あるいは負け組なる可能性が与えられるべきであると、僕は思う。そしてそれは、民間ではなく行政が関わらなければできないと考える。

＊コンピュータ応用学科２年男子学生：
私は、さとり世代というものが、本当に悟っているのかについて疑問を持っている。それは、自分がかつて悟ったような態度を取っていたが現在はそうではないことを根拠とする。具体的には、悟ったようでいた自分というのは、ただ「勝利の脱価値化」をしていたにすぎないと気づいたためである。つまりは、敗北へのコンプレックスを「勝つことに意味なんてない」と考えてそのすり替えは精神的防衛方法だと悟ったのだ。
「最低じゃん!」という言葉も、ほんとうに悟っていたら出て来ない言葉のように私には感じる。「それは間違ってるんじゃないですか？」ではいけなかったのか。その子の学業成績は悪かったのではと邪推してしまう（以下省略）。

３.今後の課題

＊教材の提示の仕方について
複数枚のプリントを配布したが、更に精選していきたい。最新の諸情報や諸知見にもっと触れさせたいという教育欲望を吟味していきたい。多すぎると困惑させてしまう。
書画カメラも用いたが、その活用頻度が高かったので、これも精選をしていきたい。
＊小課題作文を書かせた後に、可能ならそれを元に話し合うことも意義があると思われる。限られた時間のなかで、少しでもその時間を確保していきたい。
＊このテーマは、「勝ち負け」という単純な二分法のラベル貼りで収束しないこと、その先に現代をどのように生きていくかが内包されていることを授業の当初から潜在させていた。本授業において、ラベル化の先に問われることがあることに学生が気づくことを点火できた。この意図は今後も保持していくことが大切であると考える。

参考文献

1) 格差　どう考えますか？　1　朝日新聞 2015. 4. 5
2) 湯浅 誠、「反貧困―「すべり台社会」からの脱出」、岩波新書、2008、参照
3) 藤原 正彦、「国家の品格」、新潮社、2005、参照
4) いま子どもたちは　N0. 507、朝日新聞、　2013. 4. 24
5) 金子勝、悩みのるつぼ、朝日新聞、2015.4.25

第５章　まとめ

滝沢利直

４人の授業分析が報告された。現代社会を理解するための最新知見を示しながら、現代社会を俯瞰し、分析した授業である。また、学生一人ひとりが「考える」ということを目標とした授業である。自己理解・社会理解を深める契機を一定程度付与することができた。各講義で示された資料は思考を賦活させたので、小課題作文からその深まりをみとめることができる。 専門知識の習得と同様に 引き続き、社会問題への関心を喚起しつづけることが必要であることが確認できた。
国立青少年教育振興機構の調査（2014.9～11 に調査実施）によれば「自分はダメな人間だ」と思ったことがある日本の高校生は７割を超えて、アメリカ・中国・韓国の割合と比べて突出している。回答された日本の生徒のその割合は 72.5%、中国は 56.4%、アメリカは 45.1%、韓国は 35.2%だった。自己肯定感が、他国に比して日本の高校生は低いといえる。この高校生たちが大学へ進学してきた場合、そのような傾向性をもった自己評価を大学生もしていることが推察できる。様々な経験によってこの自己評価が自信へと変貌していくこが大切である。大学の授業もその契機となり得る。
本科目「現代社会と人」においてもまた、その契機が要請されている。「教養とは何か」が各界で議論されている昨今である。[1]国際化の時代に、自己評価を高揚させ、それが自己承認と他者承認の相補性の感触を育むことにつながっていくように、授業改善をさらに進めていく必要があるのではないか。国際化の動向は社会全体に浸透しつつある今日、主体的・能動的に活動できる学生の学習を促していくうえでも、自己評価の高揚が引き続き課題である。

参考文献

1) 日本学術会議 日本の展望委員会
知の創造分科会「提言　21世紀の教養と教養教育」
2010. 4. 5